

心の触れ合うまちづくりに

南国市福祉展

明るく住み良い街づくり推進に努めよう——と、九月二十三日、二十四日の二日間にわたって「南国市福祉展」が開かれ、約二百五十人の市民が訪れました。

そもそも、この福祉展は一九八一年の国際障害者年を記念して、『障害者福祉展』が行われたのがきっかけとなっています。昨年は、福祉のまちづくりのモデル市に指定されたばかりで、取り組みが遅れ実現しませんでした。今年か



各施設からの展示品もなかなか好評

らは毎年続けていく計画です。

会場には、市内の各施設からの展示品が並べられ、特に清風園の人生訓を書いた書道、希望の家の子供たちの色とりどりの粘土細工などが、訪れる人の目を引いていました。また、福祉協力校である岡豊小学校の児童の絵、習字など

も展示されました。

その他、小高坂厚生センター・高知刑務所から家具や日用品の展示即売コーナー、補装具の展示コーナーなども設けられ、また、各地区の民生委員や婦人会の方が持ち寄った品のチャリティーバザーも行われました。特にバザーには、大勢の主婦が訪れ二十一万円の収益があり、このお金は地域の社会福祉の推進に役立てていくとのこと。

二十四日には、県社会福祉協議

会会長の藤本精三氏が「私のみた中国」と題して、中国での生活の実態や福祉問題について講演を行

い、二日間にわたって福祉に対する市民意識の高揚に努めました。



多くの主婦でにぎわったチャリティバザー

『ボケ』談義

広報委員長 山本尚一

お年寄りを敬いましょうと、定められた敬老の日がある。敬老の日も、ときには軽く見られる

軽老の日であったり、さらに刑罰を受けかねない刑老となることもある。老人医療も厳しくなったが、安心して過ごせる

いうが、惚れるという字はまた惚(ボケ)とも読む。これもアバタもエクボというボケの一種かも知れない。四十歳、五十歳ともなれば、人との付き合いも上手になってオトボケすることもある。老いては、

思われた恵老の毎日であって欲しいと願うものである。人生はボケが始まって、ボケで終わるように思われる。小さい時は、夜半起きたすねボケ。年ごろになって、男が女に、女が男に会い道、これを惚れると

ボケで私が好きなのは、ボケの花で、昔、老翁者の歌った安木節の二節が思い出される。

一度咲いたら二度とは咲かぬ

二度と咲くのは、ボケの花露の情で、お客さま

花も実もない この姿を一度と咲かして

くだしやんせ

高知・池田間に、大歩危、小歩危の景勝の地があるが、川下りがすばらしい。

人は老いてもイロだけは失いたくないものである。昔、イロハ、イロハで勉強したが、今じゃ歯抜けで、イロばかり、イロもボケたらボケ色となり、人からボケなすと言われたり、自らボケつ(墓穴)を掘らぬよう頑張りたい。年は取るものでなく、頂くものであることを心にためて、感謝の日々を送



目はかすみ、耳はせみなき
頭に白き、霜をいだけり